

三河 アララギ

2021年 令和3年7月 文月

七 月 号

第 六 十 八 卷 第 七 号



ニューヨーク日記(177) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

LE COUCOU QUENELLE DE BROCHET

Blue Shoe Diaries



去年ニューヨークで一番開くのに期待されたレストランはフレンチのLe Coucouでした！ もちろん予約取るの大変！ 今年になっても大変。でも行ける日が来たのです！ だから行く前からメニュー勉強して意外な感じのとってもクラシックな quenelle de brochet が話題になってると聞いて私もクネル頼みました。もー美味しいって。想像してなかったけどすごく味と食感のバランスがパーフェクトでした。上品な味だけどしっかりとした味。記憶に残っちゃいましたね。

The most anticipated restaurant opening last year was clearly Le Coucou. Bringing the chef Daniel Rose of Spring fame in Paris to the US where he never had a restaurant! So when I got to go, I studied the menu. And surprisingly or daringly, a very french classic dish of quenelle de brochet was making the biggest splash. So I had to try it. Visually beautiful, tasted even better. The texture had a nice bounce to it while remaining delicate, the flavors were balanced perfectly with the airy lobster sauce playing nicely with the quenelle. Memorable, definitely.

表紙・蓮の台	今泉 由利 (1)	水野 絹子 (24)	重野 善恵 (33)
ニューヨーク日記 (177)	Blue Shoe (2)	牧原 規恵 (24)	木村 歩歩 (34)
アカンサスの徑	御津 磯夫 (4)	稲吉 友江 (25)	矢崎 直人 (34)
かぜくさ	大須賀寿恵 (5)	鈴木美耶子 (25)	今泉 如雲 (34)
歌集「續々草々」	今泉 米子 (6)	吉見 幸子 (25)	植村 公女 (35)
かぜくさ	牧野 鍊子 (7)	牧原 正枝 (25)	今泉 由利 (35)
雨の日	岡本八千代 (8)	東洋大学	かさね吟行会
髪斗袋	弓谷 久子 (10)	土屋はずき (26)	『酔いの徒然』 (111)
菌安居	今泉 由利 (12)	三浦 天音 (26)	楽しい時間 (104)
葱坊主	安藤 和代 (14)	市川 空未 (26)	絹の話 (128)
後に残して	清澤 範子 (15)	石川 結 (26)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
迷いと悟り	伊藤 忠男 (16)	大竹 凜 (27)	本田 勇氣 (44)
月蝕	矢崎 直人 (17)	安住 史央 (27)	『江上浩二の独り言』
御神木	森岡 陽子 (18)	田中 紗智 (27)	漢詩研修 (五十七)
鯉幟	白井 信昭 (19)	北川 優妃 (27)	『健さん』
ヤブガラシ	杉浦恵美子 (20)	森岡 陽子 (28)	露台の乱蟬
一通り	山口千恵子 (21)	高橋 育郎 (30)	蕉翁追懷
伊良湖岬へ (2)	夏目 勝弘 (22)	山元 正規 (32)	旅人芭蕉 (3)
『いこよせ』	いーはとぶ	田中 清秀 (32)	『水魚』のことから (246)
	森 厚子 (24)	松本 周二 (32)	編集室だより (二〇二二年四月)
	山崎 俊子 (24)	森岡 陽子 (33)	歌集「地球にて」抜粋
	三田美奈子 (24)	浜田 紀政 (33)	『三河アララギ』について

アカンサスの徑

御 津 磯 夫

知らぬが佛といふこそよけれと病みぬけて声もほがらに笑ひたまへる

叱りたまふこともなくなりし傍にほのほのとゐて心つつしむ

完結の無きがよろしとたのしまむ花散りすぎて若葉につづく

花房の花あらあら藤波の低きところに見えたるあはれ

花山葵しげり乱れてわが庭のながきみぢかき春ふけにけり

青々と茂りたちつつなほも咲く大犬ふぐりの花はかそけし

ギシギシの群落なして青ければここには今年の子の竹の子を見ず

地下をくぐる杉葉に負けて今年よりつひにほろびむ矢車の花

わが前をゆくはやさしきとかげ蜥蜴の仔日計はひばかり白く親らしく見ゆ

はじめよりものにすが縋らむ姿勢にて萌え立ちいづるびんぼうかづら

かぜくさ

大須賀寿恵

娘の見合済みたる部屋にいつまでもメロンの匂ひ漂ふ

スカート丈つめて穿くなり年々に背丈の縮む齡となりぬ

火葬場をめぐりてしげる旗薄出揃ひし穂のくれなゐなびく

裏庇表庇に吊したる風鈴二つ今宵は鳴らず

かさあげの工事してゐる吾が事務所ドリルの振動止むときのなく

増築の枠組の中の事務室に音の絶えざる今日も暮れたり

蠟燭の炎の直にのぼりつつ七号台風をさまりゆかむ

七号台風をさまりゆくらし灯したる蠟燭の炎のゆらがず

アスパラのおどろを根元より切りはらひ冬の蒲団を干しひろげたり

休職申請の書類二通を受付けぬノイローゼまたうつ病の診断

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

きのふ誰か掃きくれしか裏庭の紅葉の下の塀沿ひのみち

白き紅き山茶花咲けり植ゑしにもあらざるものも花明りして

派手になりし物ばかりなる簞笥にもまた新しき匂ひ袋を

渡り廊下のゆきてわが聞く冬の夜の闇に降り初む雨の音

薔^{へた}ばかり點々と黒き柿の木を仰ぎ見てをり庭のたのしさ

冬の日の流れとどまる川岸の冬草青し持統帝行宮の址

音羽川に剣と御所と玉袋と橋のあり今日は剣橋御所橋渡る

音羽川の冬の流れの澄みながら白鷺は翔ぶぞの川の上

御堂山山嵐の風の寒からずまはり道してポストより帰る

うちの庭の水仙の花を添へて挿す開基の祖^{おや}の五輪塔五基

かぜくさ

牧野 鍊子

熊除けの櫓の巨き鈴を吊る妙高の今日の吾が泊る宿

熊除けの鈴牛飼ひの鈴交通安全の鈴並べで売れり妙高の旅

真夏に来て小萩の花の低く垂れて咲きさかるなり妙高高原

朝露にみどりつやめく小丸山のぼればここは一茶記念館

一茶記念館まづ入口に「是がまあつひの栖か雪五尺」

吾が恋ふる筑波の嶺呂は若芽だつ桑畑ごしに見えそめて来ぬ

ふれ合へる君の病む腕冷えびえし石巻くだるバスのゆれつつ

栗のいがたわめる枝にふるるバス天皇林の峠越えゆく

男鹿の湯に泊りゐる夫に明日は逢はむ爪切をバッグに入れおく

はじめての秋田の旅に一人出づ白き錠剤をのむ夜行列車に

雨の日

蒲郡 岡本八千代

南の窓開けたればわが目の前にはやくも白きダチュラの二花

雨の日は傘さして来よの御津先生のお歌がすぐに浮かび来るかな

新型のコロナウイルスに殺されそうな今年の梅雨は日々の哀れさ

小雨ふる今日の日和の庭にゐる老いぼれわれの哀れなるかな

老いぼれのわれとは思はず今日もまた本本の中にこもる私^{わたくし}

いつのまにか台所にも本ばかり本の中にゐるわれの幸福

今日のこと昨日となりつつ^{ひんがし}東の窓辺はやくも白じろとして

校長職退職したる正人君よりカラーの花鉢いただきし今日よ

淡々しき黄色のカラーの花々のああ何と美しき贈りものかな

いつまでも我を先生と思ふらし浮かびくるかな彼の中学生姿

今日も思ふ男おとこと女おみなやはりちがふしきりに思ふ考え方を

喜びも悲しみもすぐ涙出づ老いるとはまたもかういふことかも

北の窓少こしくあけたり小雀らがちゅんちゅん首ふり逃げるともせず

馬場ばんば辺に昔は住みてゐたりし人立ち止まりてわれに声かけてくださる

今日もまた小雨降りをり杖つきて軒下にしばらく佇ずみてゐる

熨斗袋

豊川 弓谷 久子

青空も夕べは激しき雷雨となり明日は知れず五月となりぬ

子の点てし抹茶に今日は柏餅静かに過ごさむ黄金週間

野の路はキャラ路によし我が母の味を我が子に伝えて行かむ

好きなもの買ってと書かれし熨斗袋子より貰ひぬ母の日近し

生きゐればこそと思ひぬ子と孫が今年も母の日祝ひてくるる

御主人と堀りてくれしか金野より届きし筍子ゆでてをり

東京と名古屋の親族を案じをり増え続きをりコロナのニュース

とれし日は七十五日後のワクチンの予防接種の私の予約日

はやばやと梅雨に入りたり例年を三週間も先取りの梅雨

川氾濫のニュース流るる梅雨空と思えぬ豪雨の一日一夜

楽しみて待ちゐし皆既月食は雲の中なりうすくぼんやり

赤味帯び半分かける満月をようやく見れたよしと思はむ

日光の東照宮をあまねく写す今宵のテレビの世界遺産は

テレビの中の東照宮に満ち足りぬ行けざる一生を悔やむ事無し

雑草の伸びゆく早し草取りに追はれてはやも水無月となる

菌安居

東京 今泉 由利

自らを中心にして前後左右無限の宇宙に気配りしつつ

お釈迦様の雨安居を習ふ菌安居苦では無くして快樂でなし

美しく過してをりぬ心うち余分なことのひとつだに無し

ピンク色大満月過ぎ遺り今日は新月いちずに暗い

鑑真和尚眺めしならぬ同じ月三十六万キロ程隔たる月を

暮れなずむうす暗がりに反比例白くつきりとどくだみの花

今日の日の二十四時間自らに使ひ尽くしぬ満ち足りてゐる

時々は所在ボタンを押してみる今日はビバリーヒルズにゐると

光年を単位の中にポツネンと生きゐることよ二十三時就寝タイム

どこかしこ地球の上の体験を繙く繙く甦りくる

一億五千万年前にはじまりしと宇宙の終る日には出逢いたくない

聖観音右手に持たるる蓮菩薩かめにゆく不忍の池

あらゆる人のあらゆる願いを叶ふると補陀落よりの観音菩薩

インド原産長茄子水茄子丸茄子千両茄子スケッチしてゐる

つやつやの千両茄子のつやつやの茄子紺色に留まる暫し

葱坊主

豊川 安藤 和代

新学期も吾れも何かを始めたしピアノに英語油絵もよし
ランドセル重そうにゆく通学路応援してる柿若葉風

歌を記す窓に伸びきし青もみじ何を語るか小さく揺るる
幼な子と同じようですお昼寝も日課に入れて私のひと日
好物を持ちて娘はこの月も父の命日忘れておらず

朝の汁に玉子ひとつを落し入れひとりの昼餉犬遠くなく

六十年大切な友渥美からうれしや甘夏今年も届く

葱坊主蜂の二ひきを遊ばせて南風やさし畑の一角

忘れいし木下の鉢のアマリリス蕾伸ばしてたくましくあり

お隣りの猫が寄りきてニャーと鳴くただそれだけでうれしい私

楽しみて亡父植えたる庭木々のこの年も又緑輝く

目を病めば目のありがたさよく分りつつじの朱が眩しく見つむ

春人参金魚御飯はほっこりと金魚ひらひら夏はもうすぐ

お紅茶にマシユマロウかべ午後の部屋少しリッチにシューベルト聞く

昨夜嵐うその様なる澄む空につばめの二羽が矢の如くとぶ

後に残して

春日井 清澤 範子

八十九歳の夫はとうとう帰らぬ人に吾と娘を後に残して

家族三人の暮し又二人だけの吾と娘の悲しみ増すばかり

娘と二人の暮しに父思うただく涙に日は暮れ行きぬ

夫は携帯を持ちいておりてメール入れてありわれら二人を元気づけるもの

S状結腸の手術は無理な状態でした娘も吾も手握りしめ

夫の最期みとりたかった見舞うことも出来ずコロナが悔やまれる夫よ

コロナの中見舞うことなく召されゐる母子二人にコロナが悔し

夫の死に泣いてはいられぬ諸々の手続き次々追われ出で来ぬ

四十九日法用の日を六月二十日と決め娘と二人心気強く

迷いと悟り

大阪 伊藤 忠 男

球根をいただき鉢に植えて待つ何色咲くか来年の春

五月晴れ出会わぬままに梅雨入りか晴れぬ心に追い打ちかける

外に出ず一日過ぎて夜空観る月の明かりの眩し庭先

濡れ縁にソーランタン置きお茶に心澄ませど雑音消えず

星眺め紅茶にアンパンこれでこれ至福の時と顔ほころばす

以前より企画し準備怠らぬその地ならこそ日本一なり

あれもこれ誰とて助言有り難しなれど迷いは増すのみなりや

悩むとも手で物つくる人の性生さがある限り消えることなし

在宅の仕事に区切りいつなるや昼夕境無きに等しや

衰える体に気力反比例まだ成すことに喜び多し

引退の二文字は何がいつなるか決めるはいかなことによるかな

月蝕

東京 矢崎直人

街の中朝から走る街宣車外出自粛外出自粛

第四波いよいよ増ゆる変異型コロナウイルス感染者数

ウイルスの進化の過程分からぬが変異の速度速きに驚く

環七を高円寺から平和島二十四キロ四時間歩く

環七を歩き目につくお店には自転車バイクにそれから家具屋

環七の東急世田谷大井町横切る線路乗ったことない

平和島オレンジ色の街路灯歩けるとまた歩きたくなる

明るくも降りては止める緑雨かな傘持つ人も差すも差さぬも

月蝕のスーパームーンを探してる空みて歩く人のちらほら

梅雨入りのはやくはやくと報じられ紫陽花の花急かされて咲く

御神木

東京 森岡陽子

マスクなく大口開く鯉のぼりきれいに並ぶソーシャルディスタンス
万歩計の数値ながむる散歩道今日の帰りは少し遠回り

「又あった」笑顔の男児手に握る四ツ葉のクローバーまだまだ探す

ネパールの国旗たなびくレストラン混ぜまぜ食べるダルバートセット

石段の遥か遠くに奥の院藍のあぢさゐ朝の雫

手を添へて御神木なる古杉の木静かな世界を地球の平和を

杏の木梅の木並び実を落とす梅雨に入り前に熟さぬままに

香りゐる夜中にそつと菖蒲湯に邪気を祓いてコロナを祓いて

鯉 幟

豊川 白井 信昭

川伝ふ御津の浦見の行宮^{あんぐう}あと歌碑偲びつつ堤防をゆく

宮浦の行在所跡^{あんざいしよ}のつつじ花引馬野の風いたづらにふく

通水の農道を来て残り花在所跡をなほゆかむとす

梅雨の雨二階廊下の裏窓に新幹線を孫と見ている

角口に花びら落としてモッコウバラ春の疾風^{はやち}に落つ^{がく}罅ばかり

若葉萌ゆ花壇の中に遅れつつまずひとつ咲く薄紫花

五月半ばを過ぎてようやくに紫に白に咲き揃いたり

今月も端午の節句出して見む真鯉緋鯉子鯉吹き流し

孫の来る明日までに我手伝わむ真鯉に緋鯉六鯉六メートルほど

六畳間鴨居に二匹掛け結び今日という日の匠真の笑顔

ヤブガラシ

蒲郡 杉浦恵美子

卓袱台は円きが故に定員無し昭和の昔のそのおおらかさ
走り書きの字の慥かさよ鉛筆の短ささへも懐かし慕はし
師と語る茂吉やその母又は妻断片ひらひら会話が愉しい
共通の話題なれども我が方は教はる立場角度も仰ぎ見
この歳になりても教はる師の居ますその僥倖よ深く嘯みしむ
取り留めのなき会話には終りなしさても疲れたお茶差し替へん
未だ五月早くも梅雨入り生垣の上に延びたるヤブガラシに小雨
ヤブガラシ一日にして生垣の上に延び出て梅雨に濡れ居り
偶さかに名古屋に出れば金鯢が城から降りて栄の広場
疫病の退散念じて金鯢は地上に降りぬ二十一世紀今も
眼前の雄の金鯢歯を剥きてゐるがなにやら剽軽面ぞ

一通り

豊川 山口千恵子

めもられず眼とぢていたりけり遠く救急車の音の聞えゐる
くじ当たる年賀状はこれ一枚切手シートを貰ひて帰る
瑞々しき春大根を刻みをりとんとん音たて俎の上
わが路地を足音たててかけてゆく懷中電灯もかけてゆく
夜半なり雨本降りになりきたり時折きこゆ遠き雷鳴
大株になりてコデマリ花咲けり乱れし枝を束ねしは夫
落ち椿舗装道路に並びゐる色新しく赤と白の花
わがいれしコーヒーうましと夫の言ふ窓辺の楓若きみどり葉
カーネーション培ひてゐし温室の空になりをり母の日過ぎれば
母の日とて久しぶりなり娘の来たり大型連休の最後の昼に
一通りなすべき仕事終りたり塩アメ一つ口に含みぬ
黄素馨の花散りたまる一所色鮮やかに黄色を保つ
玉葱に青き尖り芽出でてをり青き芽もともにみそ汁の中
いつも行く薬局の軒に卵孵す燕の姿今年まだ見ず
雛孵るを待ちゐて鴉が襲ひたりと軒の燕の巢指し言ひぬ

伊良湖岬へ(2)

豊川 夏目勝弘

再びは会ふこと難き友との別れ伊良湖岬の先端めざす

坂道を上れば菜の花畑があると右手に坂がウグイスの声

ウグイスの声に惹かれ上りゆく怪しくなりぬ立ち止まりたり

左手の沢を越えし木木の間に黄色の広ごりの見えてゐるなり

坂道の下に温室の三棟あり軽トラ一台止まりてをりぬ

急斜面危ふく下りて車にて休みゐる農夫に声をかける

我が行かむ道はやはり左手に見える黄色の広ごりなき

来し道を返へして出でし岬への広き道路を車行き交ふ

松枯れの目立つ広き道を行く休める日陰の見当ることなし

ようやくに浜辺に出でて流木に自づと腰を下ろしてゐたり

上着をば脱ぎてしばしを休みたり打ち寄す波の音のよろしも

どこまでも続く砂浜ただただに見つめて時の過ぎゆくままに

砂浜に人影見えず足跡さへ無く無限とも思ひ見てをり

流されし人の哀傷せし一首浜には干涸びし玉藻くろ黒

伊良湖にて船遊びする妹を偲ぶ人麻呂哀れ都に残り

『いっとうよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

新一年「まあまあけっこう楽しい」と孫はこたふる笑顔も添へて

森 厚子

大粒の島のあさりの酒蒸しに沸きつ思ひ出満月の今宵

さみどりに庭の木々の芽ふきいだし春よ春よのささやきのごと

山崎 俊子

花香る庭に出で立つ猫と我黄金に輝く満つ月の下

梶島のアサリ貰ひし春の宵母より継ぎし饅膾めたなますにせむ

三田 美奈子

椶の芽の揚げた天ぷら小走りに持ちてきませり隣のモトさん

椒はじかみの香りの満つる台所棘切る我と新葉摘む母と

水野 絹子

大叔父の淀川伯父の山吹も咲けば懐しき人に逢ふごと

サクランボ真赤に実りて見事なり一瞬の間に鳥の餌となるのか

牧原規惠

満開の西浦園地の桜色間近眼下に青き海は広がる

ゆつたりと流るる時間に触れたくてコロナ報ずるテレビを消しぬ

稲吉友江

雨の音聞きつつ過ぐす日曜日なぜか疎遠の友を思ふ

ちやん君とずつと呼びあへる同級生今日も逢ひたり公民館にて

鈴木美耶子

公民館の東の高き美^はしき花八重の桜と友に教はる

幼らとビデオ通話のひとつときの声と笑顔に心ほっこり

吉見幸子

十年前初孫乗せて帰りの途暗き雲行きに胸さわぎせし

親友と朝ドラヒロイン今朝も呼ぶ「みつえ」「みつえ」の亡き妹の名を

牧原正枝

深々と頭垂れたる友の顔おかげと言ひそな表彰すがたよ

現代学生百人一首

東洋大学

しわが増え小さく見えた祖父の手に驚きながらその手を描く

東京都立片倉高等学校一年

土屋はづき

「字がきれい」ほめてくれた祖母思い出しメールをとじてペンを手にとる

東京都立片倉高等学校一年

三浦天音

百日紅散りはてつもったその紅にかすかに感じる夕立の残り香

市川空未

しゃぼんだま君を映して空へ舞うはじける音に春の寂しさ

東京農業大学第一高等学校一年

石川結

一瞬のすき間を抜けて光さす多摩川渡る電車の中まで

東京農業大学第一高等学校一年 大^{おお}竹^{たけ} 凜^{りん}

母をみて夢を抱くよ保育士に見れたらいいな子供の笑顔

東京都練馬区立関中学校二年 安^あ住^{ずみ} 吏^り 央^お

耳をあて少し動いたと喜んだ姉になる日が近づいてくる

東大和市立第四中学校一年 田^た中^{なか} 紗^さ 智^ち

涼しい日すぐにエアコンつける父ここにも届かぬグレタさんの声

町田市立金井中学校二年 北^{きた}川^{がわ} 優^{ゆう} 妃^き

贈呈誌

森岡陽子

月虹 139号

○雪柳白く小さき花に充つゆづれぬ意志のごとき五弁花

八幡道子

○その向かう潮風が吹いてゐるでせう白き雲をもちあぐるやうにね

横山鈴子

○截然と影に立ちゐし槐の樹のややにかすめる城址の春

小林勝

○草はらを奔りなづめる自転車を放りて子らは川原へ走る

鮫島満

○的のごとき瞳孔を持つカモメらは感情漏らさず我に対峙す

井村喬泉

冬雷 2021年 6月号

○濯ぎもの取りこんであるベランダに早も飛び来るさくら花びら

森藤ふみ

○寒椿しつかり生きよとささやきの光の中に赤を揺らせり

富田眞紀恵

○頂に張り出す枝に隼の止まりて四方眺めておりぬ

斉藤トミ子

○雨肩を抱える形に葉を巻きてすつくと伸びゆくものの強さ逞しさ

高松美智子

○鉢にやる水の中にも花びらあり春を知らせる六階までも

山本貞子

○暮れなづむえごの木下に佇みて友偲びをり散る花をみて

倉浪ゆみ

○とほ山はけさの暖気にかすみゐて富士の白きが雲にまがへり

稲田正康

○玄関の犬の置き物マスクして子のいたづらと主人は笑ふ

植松千恵子

○汲む水の音に温みの萌したり花に水遺る春分の朝

松本英夫

○真ん丸な黄色き小花に光射し泡立つやうにミモザは咲きたり

吉岡松世

埼玉さんさん音頭

高橋育郎 作詞

1、さんさん 埼玉 彩の国（ソレ）

彩り豊かに 輝いて

太陽の恵み 燦々と

サクラソウ咲く いいところ

生涯現役 はつらつと（ソレ）

さんさんさんで行け ささんとな

2、さんさん 埼玉 彩の国（ソレ）

文化の花が 咲き誇り

スポーツさかん 拍手が起こる

老いも若きも 汗光る

生涯現役 力湧く（ソレ）

さんさんさんで行け　ささんとな

3、さんさん　埼玉　彩の国（ソレ）

秩父の山は　ふるさとよ

田畑潤す　荒川の流れ

白鷺舞飛ぶ　青い空

生涯現役　開け行く（ソレ）

さんさんさんで行け　ささんとな

4、さんさん　埼玉　彩の国（ソレ）

神代の国から　うけつがれ

旗は勾玉（まがたま）　幸魂（さきたま）

さあさ元気に　県おこし

生涯現役　手を組んで（ソレ）

さんさんさんで行け　ささんとな

『俳句』

鐘ひとつ撞いて八十八夜かな

松本周二

艶めきて花も緑の柿若葉

四阿に猫の昼寝や花馬酔木

さび色を岩根に残し滴れり

山元正規

漢方医の抽斗あまた走り梅雨

三百年の幹の振れや藤匂ふ

蹲いに美草浮かべて夏に入る

田中清秀

初夏や笥の水と浄め塩

峯ひとつ残して里の遠霞

草もうの隣の墓石蜥蜴さる

森岡陽子

葉ざくらの川辺に遊ぶ石の山

里山にすれ合ふ葉音風薫る

河鹿鳴く黙り込んでる露天風呂

浜田紀政

鍵ひとつ波間に放る春の月

島の灯に間違ふときも烏賊釣火

白百合や遺影の夫は若きまま

重野善恵

卯月曇り容易に來ない空き車

菖蒲笛音劈ける湯殿かな

咳ひとつあやめも枯れん疫病かな

木村歩歩

七回忌風に積もりし竹落葉

白ばらや鋏に怯え花弁落つ

湧水の砂吹き上げて鮎生きる

春の闇歩ひて人居ぬ平和島

矢崎直人

公園の傘忘れられ夏の雨

南風しかと踏ん張るスカイツリー

白河の北に百里や城の春

今泉如雲

青梅や医学校ある城下町

八重桜の名に楊貴妃咲耶姫

六月やわが胎内の阿修羅像

植村公女

カミさんの話で終り冷奴

十薬や地藏の帽子新らしき

銀色の玉を宿して大蓮葉

今泉由利

明日^{あした}には散るさだめあり蓮の花

国分寺崖線上の夏薊^{なつあざみ}

白鳳の世に分け入らむ木下闇

童顔の白鳳^{なつえもん}に夏衣文

かさね吟行会

「吟行会が中止になったので⑦」 5月

田中清秀

昨年春から吟行会が中止となるのは7回目である。予定では5月に寺家ふるさと村へ行くことになっていた。新型コロナウイルスの感染者数は、今年の5月末時点で累計約74万人超、死亡者も1万3000人に上っている。世界各国の感染状況から見ると日本は桁違いに少ない国だが、医療崩壊への懸念や感染力の強い変異ウイルスの出現と、言う新たな要素も加わり安心できない状況が続いている。このような状況下では吟行の中止は止むえない、早くワクチン接種が進みいわゆる「集団免疫」の状態になることが待たれる。

以下は暇人のひとり言なので、読み過ぎして頂いて結構である。

「なぜ規律正しいと言われる日本人が外出自粛をなぜ守れないのか、考えてみた。

理由のひとつは、自分だけは大丈夫で感染しない又は

感染しても重症化や死亡もしいないと思ひ込んでゐる。マスクをして手洗いやアルコール消毒と三密回避していれば安心と過信する人が多いからかも知れない。

もう一つは経済活動が停滞する方がコロナより怖く、社会不安が起きると信じている人がいる。諸外国の政策にはその考えがあるようだ、日本でも飲食業の経営は言うに及ばず、旅行業や航空業界は大変状況である。

また、心理学的には、感染率の極端な矮小化や数字感覚の麻痺とか慣れが起きてしまう。例えば、一年前の人々が今の各種指標や感染者数を見たらびつくりするはずだが、毎日見ている今の我々はさほど驚かない。また、インドの感染者数が一日三十万人と聞くと日本は大したことはないと感じてしまう。

視点を変えて見ると、外出自粛を守れない人達を繰り返し報道するマスコミの情報が逆に従わない人を後押しして、みんなやっているのに自分だけ我慢するのはいやだと思わせてしまう。さらに言えば混乱や不安をショー化するワイド番組の放送やその外出している人へのインタビューももつともらしい。視聴率偏重のマスコミのあり方が今回のコロナ禍の報道で問われるのではないか。

ワクチン接種についても、発症を90パーセント抑えら

れるという高い効果が表示されており、副反応が多くても1万人に数人程度で有ればそのリスクよりも免疫効果のほうが良いに決まっている、なのに心配をことさらに煽る報道も肯けない。」

「新型コロナウイルス感染をこの程度に抑えられている原因は、日本の優れた国民性によるものだと思う、山中信弥教授の言う〈ファクターX〉の存在を私は信じている。未だに分からない部分が多いようだが、マスク着用や毎日の入浴などの高い衛生意識、ハグや握手をしない、靴を脱ぐ生活習慣や大声での会話が少ない生活文化、BCGなどのワクチン接種との交差免疫、加えて保健所やクラスター対策班の献身的な活動、大規模イベントの中止やあるいは制限した開催などの良識有る行動、などが上げられている。」

「また、日本古来の考え方と言えば、苦しいときの神頼み、八百万の神を畏敬する信仰心があげられる。交通安全や健康祈願、結婚や受験のお願い、都合の良いときだけ敬うとのそしりはあるが、真剣にそして素直に拝む心は大切にしたい。それは祭祀や鎮魂の行事など古くからの伝統文化として息づいている。」

前にも書いたが改めて〈妖怪アマビエ〉を思い出して

みよう。御利益でもしかしたらコロナ禍を退散してくれるかもしれない。」



肥後国海中妖怪(アマビエ)
京都大学附属図書館収蔵

『酔いの徒然』（一一一） 丸山 酔宵子

『新型コロナ禍の徒然なるままに』

再びの緊急事態宣言、とうとう飲食店でのアルコール提供禁止。「食事に酒無し」これは吞兵衛にとって決定的な問題で禁酒法時代に逆戻りした感がある。

新型コロナ禍でも週に2〜3回日比谷や有楽町のロードショーを見て、銀座や自由が丘で一杯が楽しみであったのだが、映画館は悉くクローズ。それではと、家でアマゾンプライムとかネットフリックスで何回か見たのだが、矢張り迫力不足、物足りなさと感じ一切見なくなつた。

朝、カーテン越しに5月の爽やかな日差しが寝室に零れてくる。さあ、今日一日、緊急事態宣言下、我が後半人生、徒然なるままに、一体どのように過ごせば……。下手な俳句はそれなりに作っているが、拙作俳句にはついつい「コロナ」を入れた俳句が多くなり、もう一つ縦横無尽に羽ばたくことができない。

それでは新たに何をしているかと言えば、池波正太郎、司馬遼太郎、藤沢周平などのまだ読んでない本を読んだり、そう、最近では、カミユのペストを心して恐る恐る読んだ。

突如ペストの猛威にさらされた北アフリカの25万人の港湾都市オラン市。ペストの蔓延で、次々と罪なき人々が命を失っていく。オラン市は感染拡大阻止のため外界から完全に遮断。医師リウーは、友人のタルーらとともにこの極限状況に立ち向かっていくが、あらゆる試みは挫折しペストの災禍は拡大の一途をたどる……。

改めて、現実の世界に広がる新型コロナを考えると、人類的持つ永遠に避けがたい宿命を感じてしまう。

体力維持のためスポーツジムには通っているが、この緊急事態宣言で閉鎖。しかし、太陽と清々しい空気を求めて、昼過ぎには愛車のマウンテインバイクを駆って駒沢オリンピック公園周辺の走りは欠かさない。帰路スパーに寄って晩酌のアテの刺身を見繕ってくるのである。コロナ禍で新たに挑戦したのはギター（アコースティック）。生来の不器用とどうしようもない飽きっぽさで、学生時代はフォークブームで、ブームに乗ってやつ

ては見たが長続きせず、無能無芸、只管麻雀と酒に浸っていた。

ギターを始めようとした動機は只管不純。新コロナ禍が終息し、銀座でゆっくり飲めるようになった暁には、「ママ、ギターある？」とか恰好つけて、弾き語りで歌って驚かせたいのが本心である。

昨年末、手ごろなオーセンティックギターを購入し、老化し硬直した指を騙しだまし弦に添えて「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド」が出来るようになった。いざ、これからは実地レッスンと自由が丘のギター教室に連絡したのであるが、愚妻の一言「濃厚接触になるからやめなさい！」

ということ、今は、Zoomでのギターレッスン。銀座での驚きのパーフォーマンスが目的であって、アンコールも含め、まず3曲をマスターしたいと、「井上陽水：少年時代」「ベリー・コモ：For The Good Time」の集中特訓。手前味噌ではありますが、それなりの形になりつつあり、もう一曲「ビレッジシンガーズ：亜麻色の髪の乙女」に突入中であるのであります。

梅雨入り前の爽やかな5月の陽も沈むころになると、

どうしても酒が恋しくなってくる。ゆっくり風呂に入り、先ず、ビールでスタート。40年来、家でのビールは「サッポロ黒ラベル小瓶」で、近所の酒屋からケースで頼んでいる。扨て、それからは何を呑むか・・・、日本酒、ワイン・・・。

最近特に気に入っているのは、スペイン CAVA（カヴァ）である。基本的に、フランス・シャンパンと同じ作り方（瓶内醗酵）で、瓶の姿もスペインらしく洗練されている。美味しさ勿論その価格のリーズナブルなこと。600円から800円で十分美味しく爽やかに楽しめる。

栓を開けシャンパングラスに丁寧に溢れないように注ぐと、品のいいバブルが湧き上がってくる。体にも良いし、美味しいし、何といっても手頃ですし、華やかさもあります。

それでは今宵も CAVA を空けて乾杯と行きますか・・・。

とめどなく弾くバブルや夏近し

酔宵子

楽しい時間 104

山本紀久雄

2021年5月31日

九代目市川團十郎・・・其の十

小林新助は弾左衛門との裁判に勝訴。京都に戻った小林新助は、弾左衛門との裁判結果を『江戸公事日記』を書き、脱稿したのは宝永5年（1708）6月26日。

この写しが、小林新助から江戸の芝居関係者の誰かに送られ、その誰かから二代目市川團十郎に渡り、二代目は同年に、これの全文を写して巻物にして『勝扇子』と表題を名付けた。

ここで留意すべきことは、二代目が『江戸公事日記』に深い関心を持たねば、今日まで『勝扇子』が伝わらなかったということである。

ということは、二代目に小林新助の裁判結果に関心を持たねばならぬ理由があった、と推測できる。二代目の父は初代團十郎であるが、不慮の死を遂げている。元禄17年（1704）2月19日、葺屋町の市村座の『移徒十二段』に出演中、役者の生島半六が楽屋から突然壇上に上がり、隠し持っていた刀で團十郎の脇腹を刺して絶命させた。45歳だった。二代目はまだ九歳と言いつつ17歳。

元禄17年が宝永と改元され、九歳はその7月に山村座で二代目團十郎を襲名し、この舞台では大役を与えられたが、その後は初代の七光りが薄れるとともに、端役が続いた。このような時に小林新助の裁判が起きたのである。

二代目が人気を確立したのは、正徳3年（1713）山村座で、春の名題『花屋形愛護桜』という「助六もの」を公演してからである。

小林新助が江戸に出発する数年前、京都で話題になった心中事件があった。侠客と遊女の情死。男は「万屋助六」。遊女は島原遊郭の「揚巻」。この心中事件は歌舞伎や浄瑠璃となり京・大坂で人気を博した。

これを聞いた二代目、自分でもこの心中劇を演じようと思いついた。そして、初代の荒事の骨法を基本にしなが、和事風のやわらかさを取り入れていくという工夫を編み出し、新しいタイプの表現芸を作り上げ、これが絶大な人気を博した。

小林新助の『江戸公事日記』を全文写し、『勝扇子』巻物にした宝永5年から5年を経た正徳3年に「助六」を初公演したのである。この間、二代目は何を考えていたのか。

それは芝居役者に対する偏見と、役者が七乞食と同じように見られているということへの対応策であつたと思う。七乞食とは、猿楽、田楽、さら説教（説経節）、青屋（藍染屋）、エタ、革屋、鉢叩（大道芸の一種）である。特に小林新助の裁判で、町奉行が役者を「弾左衛門下タ乞胸同然」と言い放つことに屈辱を感じていた。

二代目には自負があつた。それは祖父の堀越重蔵（十歳とも言う）の子孫であることへの誇りである。なかなか気骨あり、人望厚く地子物代を務めるほどの顔役だった。侠客たちとの交際もあり、「孤の重蔵」とも、また顔に疵があることから「面疵の重蔵」ともあだ名されていた。著名な侠客唐大十右衛門と親交があつたと言われている侠客であり、重蔵の祖先は武士だったと言いつつ伝えている。

つまり、自分の出自はエタでも河原乞食でもない、と信じていたのである。だから芸能人を河原者として蔑む風潮に、大きな不満を持つており、有名になればなるほど、役者の身分の低さが気になる。何とかして役者の地位を向上させたい。その想いが小林新助の『江戸公事日記』に飛びついたのでないか。つまり、エタで

も河原乞食でもないという根拠として同記録を求めたのだと推測する。

『助六』初公演から3年後の正徳6年（1716）の『式例和曾我』では、「助六じつは曾我五郎」という設定で再演した。それから33年後の寛延2年（1749）、62歳で演じた『男文字曾我物語』で、ほぼ現行に近い扮装と演出の「助六劇」を完成された。

つまり、今、見たり読んだりすることのできる『助六』舞台は、二代目の時に出来上がり、現代では『助六由縁江戸桜』という演目となり『歌舞伎十八番』の通称『助六』とよばれているのである。ストーリーは曾我五郎時致が、花川戸の助六という侠客となつて、源氏の宝刀・友切丸を探し出すため吉原に出入りするうちに、三浦屋の傾城・揚巻と恋仲になり、吉原で豪遊する意休という老人が、この刀を持っていることを聞きだし、奪い返すという舞台である。

『彈左衛門の謎』によると、二代目團十郎は「助六もの」の上演に当たつて、悪役の「髭の意休」は長吏頭彈左衛門をモデルにしているという。二代目は小林新助の『江戸公事日記』の全文を写し「勝扇子」として記したが、その目的は彈左衛門の裁判に小林新助が勝利した経緯、それを芝居舞台でうたい上げたかったのだ。自分の思いを『助六』に込めたのだ。

江戸時代の彈左衛門制度は明治維新後も残つた。だが、明治4年（1871）8月28日、明治政府は「穢多非人等の称や身分の廃止」などの旨を記した太政官布告第449号を布告し、エタがいなくなり、エタ頭は必要なくなる。



（現代の「助六由縁江戸桜」 左から助六、三浦屋揚巻、意休）

このようにして歌舞伎役者が闘ってきたエタ・非人制度は法律上消えたので、役者にも社会からの偏見はなくなつたと考えたいが、実は、明治になつて改めて浮かび上がった課題があつた。それを如実に示したのが明治5年（1872）6月25日付『東京日日新聞』である。

『抑穢多非人の称を廃し平民同一の御趣意ハ門に食を乞道路二紙屑を拾ふ者も平民同一の儀にてハなるまじく各従古の穢業を廃させ示後平民たらしめんとの御趣旨ならんか俳優も業を廃し或ハ商法を開き或ハ葉茶の開墾を叙事せバ無論平民なりと云と雖も令顔に紅粉を粧ひ衆の愛顧を企望するの以上八身分上にも別なりしと勘弁し人の嘲りを醸すべからず・・・』参照『明治歌舞伎の成立と展開』漆澤その子著 慶友社

この記事は何を意味しているのか。それは、役者という者は、何らの生産性を上げることなく、その「令顔に紅粉を粧」つてまで「衆の愛顧」に応じ、芸を提供するにすぎない「業」であるから、「門に食を乞うて」施しを受ける「穢多非人」と同様の類と認識される。したがつて一般の国民から見ると、お前たちは依然として「河原乞食でないか」というのである。

これは役者としての稼業に対する本質的指摘である。

二代目が「勝扉子」を書きのこし、以後、代々の市川團十郎も「歌舞伎関係者が、不浄の者ではないことの証拠です」と、同書をもつて主張してきたが、その不浄と並び称された相手の立場が消えてみると、「役者は所詮、河原乞食と同様ではないか」と明治のマスコミと、その背景に位置する般大衆から指摘されたのである。

役者自身へ「新しき身分制なき時代に対応する役者哲学」、それは「自らの本来姿を基本から見直すべき未来像」であるが、それを求められたのである。

この問題の改革を行ったのは九代目市川團十郎である。次号に続く。

絹の話 (128)

「アトリエテレビ」 今 泉 雅 勝

山幸彦の座した敷物

日本人が初めて絹を知る

古事記、日本書紀に記されている火照命（海幸彦）と火遠理命（山幸彦）が互いに仕事を替えて、山幸彦が海に釣りに出かけ、釣り針を無くしてしまい、その釣り針を返すよう海幸彦に迫られ、狩猟を生業にしている山幸彦にとって、骨針を作る事は漁労を生業にする海幸彦より手馴れたもので、山幸彦が幾つも作って海幸彦に渡しますが許してくれません。ついに山幸彦は海中深く釣り針を探しに行かなければならなくなり、悩んでいる時、海水の神霊のシオツチノカミ（塩椎神）に出会い、マナシタカマ小舟を与えられ、それに乗ってワタツミノミヤ（海神宮）に行け、と教えられます。

この話は誰もが知っている日本の神話です。時代は神武天皇の祖父の時代ですので、2700年位前の話です。海神宮でどんな生活をして来たか詳しく語られています。山幸彦は大和族として丁重に迎えられ、見た事も触れた事もない、柔らかな敷物の上に座らされたと語ら

れています。これぞまさに絹の真綿かフェルトの様な敷物ではなかったか。山幸彦の驚きと感激はいかばかりであったかと思われます。

この神話は日本人が初めて絹に出会った事を暗示してはいないでしょうか。

ワタツミノミヤ（海神宮）とは

ワタツミノミヤは何処でしょうか？

最近、愛知県蒲郡から2月に小さなヨットで漂流実験をした例が二つあります。伊良湖岬を出ると黒潮にのって三陸の方に流されると思われましたが、季節風にあおられ、八丈島く小笠原諸島付近を通り、一度は鳥島に着き、二度目はさらに南下して台湾とフィリピンの中の島に漂着したという例があります。同じ様に山幸彦はマナシカタマ小舟（丸木の双胴船？アウトリガー船？）に乗って、揚子江河口に漂着したと考えられます。

当時揚子江河口に居住していた人々はミャオ族（苗族）で、クワコの繭の蛹を食べて、口からずり出した絹糸束を発見し、絹綿（繭絮）文化を発展させており、植物の蔓より細くて強靱な絹紐や骨針で網や織物、を作っていました。今日でも上質な真綿は杭州産と言われます。

そこに着いた山幸彦は三年の間彼等と暮らし、海神（ミャオ族）の娘（トヨタマ姫）と婚姻し、骨針はもちろん、

絹綿はじめ様々な品を携え、技術者集団を連れて帰国しました。婚姻した姫は妊娠していて後日山幸彦を追いかけて来て出産して海神宮に帰り、妹のタマヨリ姫が姉に代わって子供の養育のために山幸彦の元に来ていたことから、山幸彦は漂着などというのではなく、大和族と気脈を通じている航海の民（塩椎神）の老練なクルーの助力によって小舟でも安全に航海できたと思われるます。

当時すでにミヤオ族は熟蚕（糸を吐く直前の蚕）の首を切ってテグス糸（釣り糸）を作っていたと思われる事から、山幸彦が失った物は骨針釣り針ではなく、めったに入手出来ないテグス糸であった可能性があります。

テグスは漁労族の海幸彦でも作り方を知らず、遙か未知のワタツミからもたらされたと思われる物で、狩猟族の山幸彦には返せるはずもなく、山幸彦がいくら骨釣り針を作っても受け取らなかった訳が判ります。

真綿と生糸

1万年前に揚子江河口周辺で絹綿が発見されてより、5千年後の黄の時代に繭から1本の生糸を揚げる事を黄河周辺の漢族が見つけました。漢族はミヤオ族が作っていた紬ではなく、5粒の繭から揚げた細い生糸で蟬の羽の様に薄く、霧の様に柔らかで軽い織物を作り、それを作る為に大量に残る残糸も漉いてフェルトや紙を作り、

それらを交易して鉄器や馬を入手して強大になったように、大和族（山幸彦）はミヤオ族との接触で金石併用の新たな文化の力をつけ、周辺種族と連携し、遂には隼人族（海幸彦）を従え国内を統一して行きます。

そうして南伝ルートでの絹は900年後の卑弥呼の魏王への献上品（魏志倭人伝）に繋がって行きます。

また日本古墳から出土する夾紵棺（きょうちよかん 高貴な人の棺で絹などが漆で固められている棺）に使われる繭の品種なども南伝絹と思われるものがあります。

山幸彦の座った絹の再現：気持ちのよいわけ！

絹枕、毛布、ネックホルダーなどを作りました。絹は綿状態で大量に使うと薄い絹織物とは全く違った、心地よい穏やかな気持ちになります。

その訳は絹が必須アミノ酸で出来ていて親和性に富み、細く絡み合った繊維間と繊維の軟結晶部分の二重空気層が温度、湿度を程よく調節し、しなやかな絹に触れると幸せホルモン（オキシトシン）が分泌され、肌で感じる「絹鳴り」の音で癒し効果が増幅されます。

さらに余剰活性酸素の中和力により疾患（肩こり等）や老化が抑制されるので、まさに不老長寿の快適素材と言えるでしょう。山幸彦の快感を表現してみましよう！

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2021年6月7日

ギョツとする環境

気温の高さより湿度の高さの方が

熱中症のリスクも高く身体にこたえます

6月病真つ只中の季節です

涼しい風が吹き抜けると

とても気持ちが良いです

青空が広がると清々しいです

植物の成長が驚きです

お天道様に当たるとホツとします

身体や心がギョツとしてくる環境でも

自然が隙間をあけてくれます

あとは

3S を毎日の習慣にして

特に湿度の高い日は水分の種類を変えましょう

身体に熱がこもらない様に

小便の回数を増やしつつ汗をかく身体にしましょう

今日も笑いながら行きましょう

2021年6月2日

部屋の湿度を下げてカビを防ぐ

去年は梅雨にすっかり長く多く雨が降り

湿気が多くカビなども生えやすい環境でした

今年もしっかり雨が長く降ると

昨年のカビもあわさり増殖し

室内にカビの胞子が舞いそうです

そこで

湿度は下に多くたまります

面白い事に部屋を 上 中 下 に分けたとすると

上 (天井) 付近と 下 (床) 付近では

湿度は20%くらい違っていたりします

更に 中 (腰くらい) と 下 (床) でも

10%くらい違っていたりします (本田カイロ調べ)

ですので

除湿剤などは床 特に部屋の隅や奥などに置くことを
お薦めします

除湿剤は効果がない という考えもあるらしいのです
があの水分のたまり具合を見ると…

この時期は

エアコンのドライだと除湿は出来るけど寒く身体が冷
えてしまいますよね

そこでお薦めは 除湿器 です

湿度も下がらず湿度だけ下げてくれます

梅雨の嫌な蒸し蒸し感をかなり軽減できます

室内のカビの繁殖抑制にも効果があると思います

梅雨は色々大変ですが

雨とその時期の植物の成長を楽しみたいと思います

今日も笑いながら行きましょう

「江上浩二の独り言」 43 江上浩二

垣間見るデジタルマーケティング

五月二日の深夜番組、英語のブラシュアップの為に観ている米国CNBCの番組で最新のIT技術を適応させたデジタルマーケティング(DM)について議論していた。簡単にいうとDMを上手く適応させて消費者に特定商品をもっと使ってもらおうと策を練っている企業の責任者と、ネット通販で色々な商品を購入経験のある消費者を代弁している方、あとは番組のコーディネーター役の方が登壇している。

米国の有名企業のDM信奉者と消費者を代弁しているような見える通販経験者との話が噛み合わない。どこが噛み合わないのか、DM信奉者はインターネット、モバイル機器、アプリの技術論のみにフォーカスしている。広告の始めの10秒プラス幾らかの時間は視聴率のカウントをしないではほぼ全部をみってくれた広告の後の方の時間で視聴率をカウントするとか、消費者の通販購入履歴データや未購入品をネット検索したデータを基にネット視聴中の画面に広告を入れ込む細工をするとか、消費者

が持ち歩いているスマホが有名コーヒー店の前を通り過ぎようとすると、コーヒー如何ですかみたいな瞬時広告をするとかの話しを早口の英語で喋り捲り立てている。消費者を代弁しているネット通販経験者は、どちらかというとDMの恩恵は受けているとは思うのだが、感情論が中心で、本当に視聴率なんか正しいのか、皆さんも経験あると思うが、インターネットの画面に固定的で広い面積に、もう買ってしまったので購入しない商品の宣伝広告が表示され、本当に見たい、検索したい事のスペースが狭くなってしまうことへの不満、さらに私は〇〇の商品はネットで調べるだけで購入は店舗だ、みたいなことを言い合っている。

昨年からコロナ禍でリモートワーク、オンライン学習・会議、ひいてはライフスタイルを変革しようと世界中で叫ばれ、実行され始め、業績を実際に伸ばし、利益を確保出来ている企業は所謂、ネット通販を含むインターネットサービス提供企業とネットワーク機器とデータセンター・クラウドインフラ投資をしている企業で、殆どが欧米系の企業である。

ちょうどこのCNBCの番組の前日の五月一日に私が経験したことは、知らずのうちにDMの事業戦略に取り込まれているというか、言葉は悪いがDMの「餌食」になってしまうのかと思わせるくらいのものであった。

家庭で印刷できる名刺や各種分類表示出来るカード、接着剤付きラベルなどを販売しているA社という企業がウェブ上で無料公開している印刷ソフトサービスを久しぶりに利用しようとした。ユーザが名刺を作成したい時、A4サイズで十枚名刺をプリントできる用紙を先ず購入する。そして、インターネットのサイトを検索して、提供されているソフトのページを探す。そこに行くと自分のパソコンにダウンロードしますか？ クラウド上で利用しますか？と問われ、今windows 10版が利用できますと論され、私はクラウドの方を選択した。あとは以前利用したことがあるので、縦横書きの文字選択や写真を含む図形作成やダウンロードで対応して行こうと思っていた。

これも元々DMの一環
自分のアカウントを登録でき、ログイン可能だが私は未登録で利用

久しぶりに使おうとして遭遇したこと

以前あった用紙選択の機能がない

手元の購入した用紙に記載の5桁の番号を入力する方式へ

私は他社のA4版で一般的でない十二枚ラベル印刷

できる用紙を用意していた

類似の十二枚用のA社の用紙番号を前もってネットで調べる必要があった

日本語用文字フォントが少ないことに気が付いた
親会社が米系外資企業

ソフトの使い勝手

以前とほぼ同様、作成ファイルの保存が以前はアプリの名称フォルダー自動生成されたが、新サービスアプリではwindows 10のダウンロードフォルダーへクラウドから落ちる

DMと広告費用だが、以前コンサルの仕事で調査したとき、世界一の多国籍インターネットサービス企業が得る広告収入は日本国内の企業が出費する広告費用とほぼ同じ金額であった。ユーザがあるサイトへ動画を提供し、多くの視聴者が「いいね」みたいな好意・賛同を示すと多くの視聴者の心を動かし了影響力のある動画を提供したユーザはある規模のリターン・収益を、そのサイト運営者から得る仕組みが出来ている。短絡的にはサイト運営者に広告料を支払った企業が負担するのである。しかし、広告が商品を沢山消費者に購入してもらうための具であり、結局は消費者が負担しているのだ。

漢詩研修 (五十七)

千代田岳精会 平井茂行

夏か日じつ悟ご空くう上じやう人じんの院いん題だい是すの詩し

杜と

荀じゆん

鶴かく

三さん伏ぷく門もんを閉とじそ一いち衲なりやうを披ひらく

兼かおね松しょう竹ちくの房ぼう廊ろうを蔭おほう無なし

安あん禪ぜんは必かならずしも山さん水すいを須もちいず

心しん頭とうを滅めつ却ぎやくすれば火ひも亦また涼すずし

【作者】 杜荀鶴（八四六～九〇四）晩唐の詩人、字は彦之。杜牧の末子。池州（安徽省）の人。大順二年（八九二）の進士。唐乾符二年（八七五）杜荀鶴二十九歳の時、黄巢の乱が始まった。

【語釈】 （題）悟空上人院（題）、障壁、石壁、屏風、門扉、詩板、木の葉、等に詩歌（原則として自作のそれ）や姓名を題（か）きつける意。悟空上人は未詳。（三伏）一年中で暑さの最も厳しい時節。夏至の日から数えて、三番目の庚の日を初伏、四番目の庚の日を中伏、立秋後の最初の庚の日を末伏という。新暦では、ほぼ七月中旬から、八月中旬に相当する。（披一衲）ひらくと読み、僧衣の前をはだける。（兼無）兼は全、絶の意。兼無、は、全く、ないの意。（房廊）部屋と廊下。（安全）単に坐前する意。坐前すると、身心が安楽になるため、安全という。（不必）、とは限らない意。（須山水）山や川を必要とする。（減得心中）心中の雑念や分別心を消し去ること。（火自涼）火の如き猛暑さえも、本来涼しく感じられるものなのだ、の意。

【通釈】 夏のある日悟空上人の僧房の壁に書き付ける。一年中で最も暑い三伏の時節に、戸を閉め切り、僧衣をまとって、坐前にはげんでいる、上人のいる僧房や廊下に、涼しげな木陰を落とす松や竹が全くない。坐禅には必ずしも山水の環境を必要とするわけではない。無念無想の境地に到りうれば、火のような猛暑でさえも、もとより涼しく感じられるものだ。

『健さん』

中 屋 保 之

「リコカツ」というドラマを視ている。出演の永山瑛太は以前、NHK大河ドラマ「篤姫」で「小松帯刀」役、西郷どんで「大久保利通」役として重厚な演技を見せてくれた。今回は、不器用な男をコミカルに演じている。が、その不器用な様や思いの通じない戸惑いの表情が、『高倉健』さんのそれとよく似ていて驚いた。少なくとも私には重なつて見えたのである。そういえば、一九八〇年代の某生命保険会社でのCMのセリフに「不器用ですから・・・」というのがあった。

『健さん』が逝ってから二年ほど経った二〇一六年八月、「健さん」という長編ドキュメンタリー映画が公開、多くの健さんファンが集った。最近、「リスペクト」との副題がついたこの映画をBSで視聴しながら、ある出来事を思い出している。私が、明治大学に入学した一九六七年の秋、大学祭（＝駿台祭）の前夜祭を日本武道館で催した。ゲストに明治の先輩である高倉健さんが招かれていた。実行委員とは名ばかりの一年坊主の私は、イベントの進行については良く分からないまま雑用をこなしていた様に思う。突然、先輩から「高倉先輩」のお出迎えと控室への誘導を命ぜられた。舞い上がっていたのであろう、断片的なことしか覚えていない。

もう一人のゲストに、当時売れ始めていた女性歌手を招いていた。周りには、いろいろな人たちが彼女を取り囲んでいたような気がする。『健さん』に取り巻きがいた記憶がない。また、出番までの間、お勧めしたはずの椅子への着席もなかったと思う。後で知ったことなのだが、『健さん』は撮影のため海外への出発の合間に時間を割いて駆けつけてくれたようである。私はと言えどそんな事とは露知らず、厚かましくも、出番を待って舞台袖にいた高倉先輩に駿台祭のプログラムへのサインをお願いしてしまったのである。しかも、十冊ほど！『健さん』は、全く嫌

な顔ひとつ見せずサインに応じてくれた。調子に乗った私は、女性歌手にもサインのお願いをしてみた。「緊張しているのごめんね」と、お付きの方に断られた。それが当たり前であろう。

『健さん』を知る俳優や親交のあった方々は、撮影中や出番が終わった後でも椅子に座ったり身体を休める仕草を絶対にしなかったと語っている。ほんの数十分間だけの接触ではあったが、私には合点がゆく話である。

残念なことに、せっかくのサイン入りのプログラムは引く手あまた状態だったため、手元に一冊も残っていない。

ありがとう

人はいつも 伝えきれない思いを重ねて一期一会の旅を続けている。

自分の中で、とても強く思っているのは、言葉というものがいくら数多くしゃべっても、どんなに大声を出しても伝わらないものは伝わらないという、そういう思いがあります。自分の中では、言葉は少ない方がむしろ伝わる、という風に思っています。

『健さん』の言葉である。

喋ることを生業としている人の中には、口数が多くてもしっかりと要点を伝える技術を持っている優れ者はいる。しかし、特に国や企業のトップにそのような人物が見当たらない昨今を『健さん』はどう感じているのだろうか。

因みに、「リコカツ」主演の北川景子さんも、明治大学の出身だそうである。

露台の乱蟬ろだいらんせん

横山精真

筆ふでをお摺だいき臺たいに立たつ 三伏さんぶくの天てん

緑陰りよくいん地ちに満みちて 意い芒ぼう然ぜん

南風なんふう動うごかず 声こえ喧けん聒かつ

看かん取しゅす身みを振ふるう 桜樹おうじゅの蟬せみ

露臺亂蟬

摺筆立臺三伏天 緑陰滿地意芒然
南風不動聲喧聒 看取振身櫻樹蟬

（語釈）○擱筆…書く事をやめ筆を置く。○三伏…夏の極暑の期間。夏至後の第三の庚の日を初伏、第四の庚の日を中伏、立秋後の第一の庚の日を末伏という。○茫然…つかれてほんやりするさま。○喧聒…やかましい。○看取…みる。取は、強意の助字。

（通釈）机から離れ涼を得ようとテラスに立ってみるも、夏真つ盛りだ。葉陰は敷き詰められたようにしているが、暑さでげんなりとする。

風はそよとも動かず、蟬の鳴き声だけがうるさい。よく見ると、真正面の桜の木に蟬が身を震わして鳴いている。「鳴けよ鳴け 三日の命 今日の蟬」

蕉翁追懷

今泉由利

書を繙しよひもとき 敬慕けいぼせる相思そうし惹ひかる

心緒しんしよ 追懷ついかいす 俳聖はいせいの姿すがた

但歩たんぽ 行尋こうじん 前度ぜんどの路みち

乾坤けんこん 楚楚そそとして 古松こしょう芳かんばし

蕉翁追懷

繙書敬慕惹相思
心緒追懷俳聖姿
但步行尋前度路
乾坤楚楚古松芳

繙書 〓 書をひもとく

心緒 〓 ころから

但歩 〓 独り歩む

前度路 〓 到り着く路

古松芳 〓 古松かぐわしい

乾坤 〓 天地

蕉翁の歩かれた道、あとを追った、

沢山の見聞、そこから生れた言葉も心も…。

私に、織り混ぜて生きてゆく。

旅人芭蕉(3)

夏目勝弘

友人に聞いた伊良湖岬への道を行く、集落を抜けた所に坂があるからそこを上ると、菜花畑があると、ウグイスの声を聞きながら行けども山道がつづく、坂を途中で左手を見ると黄二色の広がりが見える、

どうやら道を間違えたようだ。坂の下に温室があり、車が止めてあるので温室への急な道を下りて行き、車の中で休んで居る人に道を尋ねると沢を越えた向う側だという、ここからは行けないから戻ることにした。

元の道に戻り前方を見ると左りに行く坂道が見えた。

坂を上り切った所に広い道路があり、左側に菜花畑が続いている。

伊良湖岬に向う車なのか切れ間なく通る。少し汗ばんできたが日陰もないので、立止まり水を口飲む。

少し行くと海岸に行く道があり、海沿に道が岬の方面に続いている。

砂浜に寄せて来る波の音を聞きながら歩いて行く、浜に打ち上げられた流木に腰を下ろし休むことにした。

○ 枯^い芝^しや^や、か^かげ^げろ^ろふ^ふの^の二^に三^{さん}寸^{すん} 芭蕉

笈の小文のなかにある一句である。砂浜にはかげろうは立っていないが、かげろうがゆらいでいてもよいほどである。

万葉集巻に、伊勢の国に行幸された時、都に残っていて、柿本朝臣人麿の作った歌

○ 潮^{うしほ}騒^{さわ}に伊良湖の島^{しま}辺^へ二^に三^{さん}舟^{ふね}に妹乗^{いものり}るらむか荒^あき島^{しま}み^みを (42)

今は島のほとりを行く舟は港に向う、漁船ばかりであり、沖を行く船は大きな自動車運搬船とガスを運ぶ球形のガスタンクの見

える大型船が春霞のなかに見える。

ようやく恋路ヶ浜に出れ食堂の見える方向に歩いて行く、浜辺を歩く人々は数人であり女性ばかりである。

三竿ほどの竿の見ながら腰を掛けている男性が一人居た。

なんとしてもパイの生ビールが飲みたく店を探す、どこも昼どき客の少ない所と通り過ぎ、大アサリを店先で焼いている店に入る。

一組のグループのみ、トリアエズビールと言ひ席に付く。

生ビールとメニューを持って中年の店主が来た。昼飯の注文もせず、生ビールを流し込む。

一息に飲み終え、刺身定食を注文、これが最悪の二品、朝の四時半から何も食べていないのでたちまち平らげ店を出る。

やつと落ち付いた、周囲の物が良く見えてきた。宮山原生林の山の上を四匹のトビが円を描き飛んで居る。

サシバは夏鳥として渡来するのでまだ来ていないだろう。

○ 夢^{ゆめ}よりも現^{いま}の鷹^{たか}のぞ頼^{たの}母^{はは}しき 芭蕉

十月十二日の吟、杜国の無事を確認した喜びにあふれている。門人の不幸を痛み分ける芭蕉の心に、杜国はなにものにも代え

がたい贈り物であった。傷心の杜国を励ますため、明春に予定している吉野の花見に勧めた。

杜国あての書簡に、次のような一句がある。

○ 何^{なん}に此^{この}師^し走^{そう}の市^{いち}にゆくからす 芭蕉

杜国と別れ十二月二日、名古屋にそして書籍商を営む、風月堂^{ふうげつどう}夕道^{せきみち}の宅に立ち寄る。

○ いざさらば雪見^{ゆきみ}にころぶ所^{ところ}まで 芭蕉

十日すぎ名古屋から伊賀上野に向う。佐屋から船で桑名に向う。

「氷魚」のことから (246) 岡本八千代

今夜は皆既月食の夜だった。それも見えないで此の稿を書こうとしている私。

不思議なことに、確か一昨年、父の植えた竹林の竹に花が咲いて、みな枯れてしまつて失くなつてしまつたことだつた。それが今日気づいたことに、五本の新しい竹が風にゆれているではないか。新しい竹で、やはり黒竹らしい。笹の葉も伸びつつあつて緑色鮮やかにゆれていた。私はびっくりしたと同時にうれしさがこみあげてきた。…。

こんなことがあるのかしら。まだわが家も続くのかと思つたりして興奮した。

さて、そんな気持ちの中で、やはり茂吉のことを書かねばならない。ちやうど私の持つている本「今甦る茂吉のころとふるさと山形」(短歌研究社)がある。それは「斎藤茂吉50周年記念シンポジウム(全四回)」として、出版された本である。その基調講演(第三回)に「医師・歌人としての茂吉」と題して、加賀乙彦氏の文章があつた。加賀乙彦氏は作家であり、医師であり、日本芸術院会員でもあつた人であるこの人の講演内容は、言はば「精神科医、歌人として」のことを話されたのであつた。

○茂吉は28歳で、帝大の医学科を卒業してすぐ巣鴨病院の医師になつた。

○当時は、大学の附属病院には精神科が無かつた。(精神科の患者さんが来ると他の患者さんに迷惑をかけるとかい

う偏見が医学部の内部にもあつた。精神科だけでは巣鴨に医局があつた。

○茂吉は府立の巣鴨病院の医師として、同時に東大の医師として二重の生活を最初はしたのだった。その中で第一歌集「赤光」を書いて、歌人として有名になりながら、同時に医師として働いた生活をした。

歌集「赤光」には精神科医としての生活が、ずい分描かれていたのであつた。

たとえば、こんな歌が「赤光」にある。

自殺せし狂者の棺のうしろより眩暈して行けり道に

あかく、(赤光)

この自殺者というのは、人に頼まれて入院させた男の患者が青山病院の便所で首吊りをしたのだった。茂吉はその患者の葬儀にも行き、自分が自殺させてしまつたと、その弔辞の中で述べ、かえつて相手に気の毒な思いをさせてしまつた、という伝記的な事実もあつた。茂吉は、自分の失態で自殺してしまつたというところをえ方をして自分を責めたのであつた。

つつましく一人し居れば狂院のあかき煉瓦に雨のふる見ゆ、(赤光)

これは大正2年、32歳のとき、副手から助手に昇格した時の歌。

ものぐるひの診察に手間どりてすでに冷たき朝飯を食む、(あらたま)

などの歌もあつて、その当時の巣鴨病院、青山脳病院における若い時の精神科医としての茂吉を知り、その優しさも知つた私。―次回へ。

歌集「地球にて」 抜粋

今 泉 由 利

淡々と湯気のやさしき酒饅頭食みていできぬ父母^{ちちはは}のもと

見ゆるもの皆実物にしてジャングルの湿度の中にしばし立ち立つ

ほのかなる宇宙も地球も見渡しぬ操縦室の丸き窓より

海海海聳ゆる山々また砂漠その上飛んでブエノスアイレス

アマゾンの樹々の動きの見えぬまま樹海の上を夕焼に翔ぶ

朝市にマモン・デ・アマソナを五個買うにポルトガル語を使ひてみたり

両の腕に吾が子を抱き逃げるさま異国住まいの潜在にあり

寝起きする国に言葉も習慣^{なづかわ}も合わせて生きる幼子ふたり

足し算にも掛け算にもスペイン語のある故に新しい言葉この頃覚えつ

スペイン語と日本語とを織りまぜてようやく割り算の答えでたり

亀にやる一切が大きいと抗議して西瓜食べをり我幼子は

幼子と私とが使う日本語余分なこともひと声加う

髪の色金茶白赤色混る中黒き光りて吾が子は跳ねる

今泉由利（いまいずみゆり）・略歴

短歌誌『三河アララギ』主宰

三河湾の海辺に生まれる

繊維デザインを学ぶ

親から独立するにあたり、日本から

一番遠い国に行こうと思ひ立つ

アルゼンチン、ブラジル、スペイン、

マイアミ、ロスアンゼルス、ニュー

ヨーク等に住んでみた

石畳濡らし増えゆく雨の粒テアトロ・コロンに宿る楽しさ

わが身体^{からだ}タンゴのリズム残りゐてタンゴに歩む石畳道

稲妻に近づきし日も目の位置に満月ある日も私の日々

満目の星々の中飛ぶ時はシェリーの酔ひに身を任せつつ

つらなれる万里の石垣割りて咲く花はやさしきナデシコに似て

太陽を吸いたるトマトのまる齧り塩の砂漠の塩ふりかけて

一匹の犬の走りてゆくことも麗しきかなセーヌ河畔は

沈みゆく太陽に向かひ突つ走るカリフォルニアのフリーウェイは

不自由をするが好きねと吾が子等に言われているよ英語モタモタ

空を飛ぶ翼を持たぬに飛び出だす角度に慣れた私の身体^{からだ}

泣くほどのことには涙流しつつ九千キロ程離れてゐるよ

母に近くもつと近くと布団敷き幽かに酸素の音聞えつつ

湯げたつる日本のご飯のお仏供さま我手に作る朝が来たりぬ

何事も無かりしごとく続けゆく常の心に母を加へて

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
TEL 〇三・五九二四・二〇六五
ケイタイ 〇九〇・八四三四・八六四六

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
編集室までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、
メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、
創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アラ
ラギ」誕生。

◇令和三年現在まで一号の欠刊なく、続いてき
ました、続いてゆきます。